

最近、国立大学の独立行政法人化も影響していると思われるが、官学・官民と言った各分野での協同研究が新聞などに紹介されている。しかし、その多くは研究協力的色彩が強い。大学の大きな柱に研究と教育がある。最近の傾向として多くの企業が実践即応型の人材を求めており、大学が社会に貢献する上でもこのような要請に答えていく義務もあるのではなからうか。AAI News 第 39 号でも紹介したように、国際耕種では長期的な後継者育成、人材発掘をテーマに大学との交流に積極的に取り組んでおり、これまで関係してきた大学に交流機会の拡大を訴え続けてきた。静岡大学の学生を対象にしたセミナーもその一環である。同大学には「環境修復学特論」というテーマで、農学研究科人間環境科学の専攻生を対象とした講義を依頼された。講義内容は「乾燥地・半乾燥地の環境の特徴、砂漠化の現状、砂漠化の自然・社会的要因、砂漠化防止対策、農業と環境の関わり等」であり、国際耕種の過去の経験を学生に伝える意味でも良い機会であった。

講義では国際耕種のスタッフが今回の特論を担当するに至った経緯、我々の過去から現在に至る活動、及び乾燥・半乾燥地域の環境と砂漠化の現状に関する一般的な紹介を行ったが、ここで、意識したことは教科書的な説明ではなく乾燥地域に長期で滞在して体感したことを中心説明したこと、また学生の修論のテーマとしても考えられそうな課題の紹介にも努めたことである。砂漠化の現状や防止対策の紹介に当たっては、現在抱えている課題や将来的な展望も含めて、資源管理という考え方の重要性を強調した。また、乾燥地域における農業開発の現状においては、途上国援助におけるソフト化の流れや NGO、自治体、大学とのパートナー事業の重要性にも触れた。さらに、乾燥地開発における持続性という視点の重要性や「21 世紀は水の世紀」といわれる中での節水の重要性についても言及した。

午後には個別プロジェクトの事例紹介を行った。プロジェクトに参加した本人が紹介を行い、臨場感あふれる講義となるように努めた。具体的には砂漠化の大きな原因としての過放牧に着目し、オマーン国ドファール地域及びシリア国アブデルアジズ山麓地域における資源管理の実態について紹介した。また、アラブ首長国連邦における植林活動の現況、植林技術の問題点や将来展望にも触れた。さらに、ケニア国及びパキスタン国での事例紹介では、灌漑開発における環境配慮の重要性を説明し、開発が環境に及ぼす影響と地域住民の暮らし、流域全体を包括的に考えることの重要性、住民参加型活動の重要性等を強調した。

講義終了後の質疑応答では、技術協力におけるコンサルタントの役割等も話題になり、その中で我々コンサルタントが取り組むプロジェクトの業務、JICA との関係、取り組みかたなどを率直に紹介した。学生達には講義の感想や質問を報告書にまとめてもらい、質問には出来る限りの対応を行った。こうした活動を通して、学生達にも国際協力について考える場を提供し、そこで得られた知見を彼等の研究テーマに活かしてもらえれば我々も望外の喜びであり、逆に我々も現在の学生が海外協力にどのような考え方をもち、それに対し我々が学生に何を提供していかなければいけないか勉強する格好の機会となった。国際協力事業への大学の参画が注目されている今、こうした我々の活動を通して多くの学生に国際協力の実態を知ってもらい、将来的にはこうした学生達が国際協力活動に携わるきっかけになることを望んで、今後も大学との交流活動に力を注ごうと考えている。

農学研究科 人間環境科学 環境修復学特論レジメ

2003 年 11 月 11 日

1. 参加者自己紹介 (10:30~11:00)
2. 乾燥・半乾燥地域の環境と砂漠化の現状 (11:00~12:00)
 - 乾燥地・半乾燥地の環境の特徴
 - 砂漠化の現状、防止対策、課題及び展望
 - 乾燥地・半乾燥地における農業開発の現状
3. 事例紹介 (13:30~15:30)
 - 乾燥地域における資源管理
(オマーン国ドファール地域での事例)
 - シリア国における牧民による資源管理
 - アラブ首長国連邦における植林活動
 - 灌漑開発における環境配慮の重要性
(ケニア国、パキスタン国での事例)
4. 質疑応答 (15:30~16:00)